

4 先行実践の分析

実習生は、長年学習会を有する中学校に勤めてきた。とりわけ、徳島県板野町立板野中学校で勤めた12年間は、今の実習生の根幹を形作ったといえる。同和担当教員として4年間、同和教育主事として3年間、残りの5年間は学級担任として、濃密な教育実践に取り組むことができた。「全体学習」といわれる授業手法は、同校に赴任する前年の1990年度から始められており、2002年度まで13年間取り組まれた。

「全体学習」とは、ゆとりや総合的な学習の時間を活用し、一時間目、学年の1つの学級が人権学習の研究授業を体育館で行い、学年の他の学級はその研究授業を周りで参観(この授業を「公開授業」と呼ぶ)。二時間目は引き続き体育館において学年全体で、一時間目の授業内容や資料・主題などについて討議(この授業を「全体授業」と呼ぶ)。この二時間を合わせた授業手法を「全体学習」と呼んだ。当時は学年5～6学級あり、各学年で年間5～6回の全体学習が行われていた。年によっては、各学年を代表した学級が全校生徒の中で公開授業を行い、全体授業を全校生徒で行っていた「全校全体学習」が行われたこともあった。これらは、「全体学習」の授業記録を中心として、毎年「峠を越えて」という実践記録としてまとめられている。

また実習生は、2003年度から徳島県徳島市応神中学校に赴任し、2004年度から2008年度まで、「全体学習」のように学年全体で取り組む、「合同人権学習」の実践に取り組んだ。また同校でも人権教育主事を務め、学習会活動にも取り組んできた。

「合同人権学習」とは、道徳や総合的な学習の時間を活用し、教室やミーティングルーム、体育館で、学年2つの学級が合同で人権学習を行うものである。学年2学級は小回りがききやすいため、担任の打ち合わせもしやすく、毎週「合同人権学習」が行われることもあった。規模の小さい学校であったため、前述のような公開授業や全体授業といった形式にはとらわれず、常に学年全体で人権について学び合うことに焦点をあてて取り組み、生徒の主体性をより高めるために、生徒が授業進行をすることもあった。これらは、「合同人権学習」の授業記録や学年だより、人権だよりを中心として、「My Sky(マイ・スカイ)」という実践記録としてまとめられている。

これら「全体学習」や「合同人権学習」に取り組んでいくなかで、「集団で語り合う人権学習」の良さを感じる一方、他校で取り組まれた同じような取組があまり評価されず、継続的に取り組まれないという話を何度も聞いた。そこには、「あの人だからできる(だから自分にはできない)」とか、「あの学校だからできる(だからうちの学校ではできない)」といった、残念な言葉が聞かれることもあった。どうして続かないのか。継続的に取り組まれるための要素とは何か。どうすればより多くの学校で実践が可能となるのか。そして、良さとは具体的にどういった点なのか。長年これらについて思考を巡らせてきたが、その答えを自分なりに明らかにするために検証・実践することにした。

なお、「集団で語り合う人権学習」の先行実践の一形態として、「人権を語り合う中学生交流集会」も位置づけたい。「人権を語り合う中学生交流集会」とは、1996年に始まった「徳島県学習会中学生集会」をもとに、毎年徳島県内で開かれている中学生による人権集会である。中学生が学校の枠を超え、人権をテーマとして集い、交流し、学び合うものである。自己表現力やリーダーとしての能力を高めるなかで、中学生自身が企画・運営を行うとともに、各校においても人権活動のリーダーとなることを目的として開かれている。他校の生徒と交流するため、より広い視野で人権について捉えることができ、特に小規模の学校の生徒には有効であると思われる。その内容については、毎年「人権を語り合う中学生交流集会報告書」という実践記録としてまとめられている。

先行実践の分析として、まず確認したかったことは、これら「全体学習」「合同人権学習」「人権を語り合う中学生交流集会」を経験してきた元生徒や教員が、当時どう感じていたか、今どう思っているかであった。

実習生は「集団で語り合う人権学習」を経験するなかで、いくつもの良さを感じてきた。例えば、発言する自分の言葉で生徒自身が奮い立ち、自らの可能性を拓けているように感じられたり、涙ながらにされた生徒の発言が、生徒自身を癒しているような場面に出会ってきた。また、ある生徒につながる発言がされた場面においては、目に見えない糸のようなつながりが双方に生まれ、同時に、「あなたのことを大切に想っているからね」というメッセージが伝わり、相手側には、「自分のことを見えてくれる人がいるんだ」という自己認知のような感覚が生まれているような場面もあった。そういった人と人とのつながりは、全体として豊かな感性を育み、実に様々な表現力を生んでいたように思える。また、自己をふりかえることを通

表 I -3 実践経験者調査の概要

	全体学習		合同人権学習		中学生集会	
	元生徒	教員	元生徒	教員	元生徒	教員
対象数	99人	11人	42人	2人	41人	9人
回答数	21人	8人	5人	2人	13人	8人

して、身近な友人や家族、生まれ育った地域や社会を見つめるとともに、自分自身の将来や生き方についても深く考えられていたのではないだろうか。これらから生まれる集団の仲間づくりは、互いを認知し合っていることによって生じるものであり、教職員も同じ学習者という立場として1つの輪の中にいたように思える。

かつて経験してきた元生徒や教員はいったいどのように捉えていたのか、それを調べるために調査を行った。実際に経験した元生徒や教員は多く、連絡先も把握しかねるため、連絡のとれる人のみに絞った形での抽出調査とした(表 I -3)。

調査方法は、メールによる回答依頼または聞き取りで、調査内容は、「取り組んでいたとき、どう感じていたか」と、「今振り返ってどう思うか」の2点である。

この調査結果から、重要と思われるポイントを、「大切な8つの意義」として分類し、整理した。なお、そのうち中学生に関する意義①～⑦を「中学生にとっての大切な意義」、教職員に関する意義⑧を「教職員にとっての大切な意義」とした。(回答者の実践は、全：全体学習、合：合同人権学習、集：中学生集会、と略記する。)

①「自分、大切」

- 「勉強ができるできないよりも、ここに自分がいてもいいんやなっていう、それだけで学校に行きたいなって思えるし、しんどいときは、「生きとっていいんじゃ」ぐらいになると思える」(30代女性AZ, 全, 元生徒)
- 「私に頑張る場所を与えてくれてありがとうございます。勉強もなにかもテキトーだった私がイキイキできる場所でした」(30代女性MH, 全, 元生徒)
- 「自分の意見を言うことは恥ずかしくないって思えるようになったし、きれいごとかもしれないけど、きれいごとを考へてるときは少なくともそうなればいいな、それが良いことなんだって思ってるんやからきれいごとの何が悪い？って私は思っていた。きれいごとのひとつも考えられないよりはよっぽどいい。いろんなことを考える時間、いろんな人の考えを聞ける時間ですごい貴重なことやなって思う。さすがに社会人になって、職場でもめ事がおきたって、全体学習みたいに皆で話し合うことなんてしない。大人にもあんな時間があつたらなって思うときがある。あの時間は誰にも遮られることなく自分の考えが述べられる、聞いてもらえる、答えが返ってくる。大人になると、そんなことなくなりました。だから今、思えばあの時間は本当に貴重な時間やったんやなって思う。ほんまに良かったなって思う」(30代女性UC, 全, 元生徒)
- 「全体学習そのものの存在が私の心の奥底に眠っていた自分を揺り動かしてくれたように思います。小学生の頃の私は、前に出るのが苦手で、失敗を恐れ、消極的な性格でした。しかし、中学生になって全体学習と出逢い、自分と

同じ立場のクラスメイトが自分の思いを率直に語る姿を目の当たりにし、次第に自分の中で何かが変わっていきまし
た。初めは、「自分も何か言わなければ」という焦りや義務感のような感情から始まったのかもしれませんが。しかし、発
言を終えた後には、不思議と充足感がありました。誰かの発言に自分の思いを返していく。自分の思いに誰かが反応
してくれる。そこに、「人とつながっている喜び」を無意識に感じ取っていたように思います」(30代男性IN, 全, 元生
徒)

○「全体学習が私にもたらしてくれたものは、「弱い自分と向き合う」意識です。自分の中の差別意識や卑屈さと向き合
い、それをさらけ出す勇気と覚悟は並大抵のものではありませんが、前述のような、人とつながり語り合う活動の中で、
それぞれの悩みや思いに互いに共感し、心を開いた付き合いができるようになったように思います。「相手を知るに
はまずは自分から」このような意識が私の中に自然と芽生えてきました。そしてそれは、人とかかわる上で今でも心が
けている言葉でもあります」(30代男性IN, 全, 元生徒)

○「自分にくれたあたたかい気持ちを返したいって思ったら、どうかしようとして、自分から発言すると思います。その
人が少しでも楽になるように、幸せになって欲しいから、いつもみたいに笑顔でいて欲しいから、何かを伝えたいか
ら、発言すると思います。中学校の時にそんな風に思った気持ちは嘘じゃないし、誰かの為に自分の気持ちを伝える
ことで、自分自身も救われていたように思います。自分の好きな人が苦しそうなのは私も辛かったので、相手が少し
も楽になれば、私も楽になったような気がします」(20代女性MK, 合, 元生徒)

これらの意見から、元生徒にとって、自己認知ができたり、ありのままの自分でいられる居
場所づくりとなっていたということを読み取ることができる。

また実習校における課題としてあげられている、「精神的に不安定になりがちで寂しい思いを
していたり、自分に自信がなく力を十分に発揮できない生徒」が、その存在を認め、しっかりと
とした生き方を掴んでいく意味において有効と考え、「自分、大切」とまとめた。

②「あなた、大切」

○「答えはひとつではない。人には色々な思いがあって、人と一緒である必要はないとも、あの頃の学習があったから
今思っているのかもしれませんが。自分と違う意見の人に壁を作るのではなく、そんな考え方もあるんだなって考えられ
る力をあの時につけてもらえたのかもしれませんが」(30代女性MD, 全, 元生徒)

○「全体学習という場で、一人の子の意見にじっと耳を傾け思いを巡らすという経験を積んだ子たちはきっと人の痛み
を優しさで温かく包む心を育てていったのではないかと思う。いろいろな人がいろいろな思いがあって、それが
当たり前なんだ。みんな発展途上にいてもがいているんだということを知っているから優しくなれる」(50代女性YC, 全
・集, 教員)

○「同じ目線の友達の言葉、生活を共にしている子からの語りには比較的、心を開いて考える。発表はしなくても考え
を巡らしていたことは確かである。黙っていて発言はしなくても、クラスの他の子たち同士のやりとりに、かなり心を動
かされていた」(50代女性YC, 全・集, 教員)

○「全体学習では人との関わりを学び、人を区別するのではなく、話し合いによってその人のことをより深く知ろうとする
ようになったといえます。なので、人を偏見で判断することは絶対にしなくなりました。どんな人でも短期間で“こういう
人だ”とは決めつけず理解しようと、全体学習により学び、現在の私の考えになったといえます」(30代男性MS, 全,
元生徒)

○「一番印象的であったのが、普段の学校生活では語りを聞くことがない仲間の言葉を聞くことができたことです。まじ
めとはいえない雰囲気と同級生が、実は物事を深く考えていたり、核心をついた事を言ったりする、そのことが私の中
で「偏見を持っていたら、本質はわからない」と実感するきっかけとなり、まさしく人権体験学習であったと思いま
す。人が熱くなったり、一生懸命に何かを訴えること、発言することが、恥ずかしいことではないと思えたのも、この学
習があったからです」(30代女性OC, 全・集, 元生徒)

知っているつもりになっていても、いざ発言者の声に耳を傾けると、実は知らなかったこと
に気づく。それは元生徒にとっても、教員にとっても同じであった。本当のことを知ったり他
者との違いを認めることの大切さを読み取ることができる。

また実習校における課題としてあげられている、「人を傷つける言動に同調している生徒」が
自らの行動に気づき自己修正していくとともに、他者の思いを知ることによってじっくりと向
き合える自分に変容していくために有効と考え、「あなた、大切」とまとめた。

③「伝える，大切」

- 「他の授業も自然と発表が多くなる。今推し進められている言語活動が当時にもう可能になっていた」(50代女性YC, 全・集, 教員)
- 「私は活発な方ですが、最初の頃は、周りの子たちに発表したり、自分のことを話すことで、どう思われるか不安でしたが、そのうちに、恥ずかしさや不安な気持ちより、「私の気持ちや思いを伝えたい」と思うようになってた」(30代女性MD, 全, 元生徒)
- 「はじめは綺麗事しか言えなかった自分も、幾度も話し合いを重ねていくうちに、「そうじゃない、ほんまの自分でぶつからないとみんなと分かり合えるはずがない」と察し、怖さや恥ずかしさを乗り越えて恐る恐る語ったものです。どんな話題にせよ、人それぞれの思いや意見があり、それを賛同したり反論したり、ぶつかり合いながらも理解し合えた時、仲間との絆が強くなっていったようにも思います」(30代男性AK, 全・合, 元生徒)
- 「結論から言うと、あの形態の授業っていうのは、せんといかんことやと思う。あれだけの人数の中で、あれだけの緊張感の中で、発言できる自分の強さを見つけ出す授業じゃないんかって思う。人権問題、道徳で考えたとき、明確な答えがない。差別はダメです、それは当たり前。ただ、どういう過程でダメだと思うのか、そのプロセスっていうのは、人それぞれ考え方が違うと思う。辛いレベルも違うだろうし。その中で発言を誰かがしたときに、「いや、それもそうかもしれないけど、自分はこういうこともあって、だからダメだと思うんだ」って、比較的発言しやすい問題だと思う。百何十人の中で、たった一人で発言できるっていう、その経験はデカイと思うし、してる人してない人では全然レベルが変わってくると思う。自分が分かってないと発言できないわけだし、他の人の意見も吸収できる。それで刺激も受けるし、発言も促せられる。卒業して十何年経って、あの場で発言できたことっていうのは、すごいプラスになっている。仕事にしても、プライベートにしても、堂々と発言できる。あの場で発言できてたら、高校受験の面接なんて屁でもない。会社に入ってプレゼンするとかにも役に立つわけだし。今の社会見ても自分の意見言えない子っていうのが多い。自分の意見が言えないから、人に言われたことばかり飲み込んで、それに対して自分の意見が言えないから、誰でもよかったといって人を傷つける。全体学習だけじゃなくて、グループや周りど語り合うっていうのが本当の意味でできてないから、今そういう社会になってるんじゃないって思う」(20代男性KY, 全・集, 元生徒)

伝える手法は様々であるが、いずれにしても、認められた感覚があるからこそ、次もがんばれるのである。そしてその経験は、将来にわたり生きて働くことを読み取ることができる。

また実習校における課題としてあげられている、「説明する、表現する、記述する」など、自分の意見や考えを表明するといった自己表現力を高めることに有効と考え、「伝える，大切」とまとめた。

④「つながる，大切」

- 「誰かと誰か、自分が分かり合えた瞬間とかに出会うと、分かり合えるということに感動したし、辛さも分かち合えることがあるんだと思った。自分の経験でも、中学生に関わる中でも、話し合いはやっぱり必要だと思う。みんな人との繋がりを求めているように思う」(20代女性AY, 合・集, 元生徒)
- 「クラスや学年を越えて、自分の意見にある時は共感してくれたり、またあるときは反論してくれたりして、一体感のよさなものを感じられる場所の一つでした。自分達がどうすべきかとか考えられていて良かったと思いました」(30代女性MH, 全, 元生徒)
- 「思いを出すことで周りを信頼している証になる。その信頼に応えようと周りも発言を重ねつながっていく」(50代女性YC, 全・集, 教員)
- 「私にとって全体学習は、時に感情的に発言しあうことで、その子がどんな思いなのかを真剣に考えた場でありました。そこで、人と人の繋がりがであったり、接し方など、コミュニケーションの基盤を学習できた場所であり、それが人権を侵害しないことに繋がっていると思います」(30代男性MS, 全, 元生徒)
- 「この授業があって初めてMの心のうちを知りました。初めての感覚でした。自分は何も知らなくて、どうしていいかわかりませんでした。でも、そのときはMの側に居たい、Mとずっと笑いながら話したい、と思いました。だから、頑張ってMと同じような立場になりたくて発言してたのを覚えています。私にできることは何一つなかったように思うし、力不足なんですけど、Mが一人で発言しているのを私も隣で対等に発言して、Mを一人にはしないようにしようって思ってたのかもしれませんが。私にとって、自分の気持ちを伝えるって行為を一番後押ししてくれるのは、自分が信頼している人をどうにかしたいっていう思いなのかなって思いました」(20代女性MK, 合, 元生徒)

違う意見とはつながれないというわけではない。大切なことは、つながろうとした思いが伝わることであり、それが一体感や連帯感を生むということを読み取ることができる。

また実習校における課題としてあげられている、「個々でかかえ込んでしまいがちな生徒」が自分の生き方を見つけたり、コミュニケーション力を高めることで、その能力を最大限に生かしていくために有効と考え、「つながる、大切」とまとめた。

⑤ 「学び合う、大切」

- 「そこ(授業)で考えたり、休み時間や別の場面で話をするという場面も何度もあった。人権学習からもっと発展して、別の話題のときにもそんなつながりは出てきていた。アクティブ・ラーニングになった。卒業したあとの人間関係の中でしんどいことがあったら話をするとか、そういうときのための訓練を体験させてた。今求められている教え合いにつながる場面があった」(50代男性SH, 全・集, 教員)
- 「同僚や職員だけでなく、患者さんとのコミュニケーションをとる時も聴くこともそうですが、自分のことを話すということに躊躇しないのも、あの時に慣れていたからだなと感じます」(30代女性MD, 全, 元生徒)
- 「社会に出てからもその時の活動は活かされているように思います。人との繋がりややり取り、なかなか上手くいかないことの方が多いですが、同和問題学習を取り組んでいたお陰で、自分を素直に出せて分かり合おうと努力出来るように思います。中学生の頃に真剣に同和問題に取り組んでなければ、自分に自信が持てず、綺麗事しか言えない大人になっていたかもしれません」(30代男性AK, 全・合, 元生徒)
- 「私は今は看護師を目指して勉強してます。2年の実習は、1年の時の実習を反省して積極的に患者さんに話しかけにいきました。だんだん話すうちに患者さんの、病気になってやるせない気持ちや、毎日の治療の時間の長さのしんどさ等を話してくれるようになりました。私はこの人の為になんかしたいって思いました。それからは、1年の時じゃ考えられないくらい担当看護師さんに患者さんの変化や気にしていることを積極的に伝え、自分がしたいことを伝えました」(20代女性MK, 合, 元生徒)

教え合い相談できる信頼関係があれば、共に伸びることができる。そういうチームの存在は、学びの大きな助けになるということを読み取ることができる。

また実習校における課題としてあげられている、「家庭学習や読書」など自分自身の能力向上につながる動機づけのため、またさらなるキャリアアップの意欲を高めるために有効と考え、「学び合う、大切」とまとめた。

⑥ 「人権、大切」

- 「今、社会人になって、ようやく、討論する理由・重要性が分かりました。先生方の熱さは何故?っていうのが分かるのは、社会に出てからです。幼稚で、その瞬間を生きてた中学生には、後々からじゃないと理解できません」(30代男性OH, 全, 元生徒)
- 「ずっと仲良くいたかったから、自分もそうだと打ち明けました。ビックリした様子でしたが、『アッチの人』ってひとくりみたいにしてごめん。ちゃんと一人の人として付き合うわ』って分かってくれたようでした。中学の時、全体学習等を通して学んでいなかったら、一人で我慢して隠していたんだと思います」(30代女性MH, 全・集, 元生徒)
- 「全体学習のきっかけというの、同和問題についての理解を深め、差別解消に向けて取り組んでいくというのが主な出発点だったと記憶していますが、話し合いはそれにとどまらず、クラスメイトの個別の問題や、進路の問題など具体的なところまで及び、時には自分も熱く思いを語っていたなあと感じます。同和問題自体が、中学生にとっては分かりにくいものであったし、子供ながらになんとなく口に出しにくいという雰囲気があり、全体学習の時間がいやだなあと感じたことも多分あったと思います。しかし、今思い返せば、そういう時間があってよかったなあと感じています。なぜならば、全体学習の場では、自分のことをオープンに話せて、それをみんなが受け入れられるという体制が整っていたからです。そういう場所がなければ、私はいまだに、同和地区の人に対して「触れてはいけない」気持ちを持っていたかもしれませんし、その人がもつ心の悩みに対して全く理解できなかったかもしれないからです。同和問題は目に見えないからこそ、その人の内に持っている問題が分かりにくく、解決も難しいのだと思います。現在私は関西に住んでいますが、同和地区に対する偏見をたまに耳にして、複雑な思いになることがあります。もっとそのような問題をオープンにして、みんなが自分の問題として考えることができたなら、差別や偏見はもっと早くなくなっていくのではないかと思います。全体学習のような取り組みが様々な所で広がり、みんなが自分のことをオープンにできる場所が少しでも増えればと思っています」(30代女性NN, 全, 元生徒)
- 「私の発言で友達を傷つけてしまって、今でもその時のことは思い出すとしんどくなるけど、でも事実を話して、その事実はすごく残酷で、こんなに全体学習してきても厳しい現実があるってことを思い知らされた。でも、こういう全体学習をしてきたからこそ、その残酷な事実をおかしいことやと思えたのかな。全体学習がなかったら、おかしいことにも

気づけずに、自分も偏見というか間違っただけの考えに流されていたと思う」(30代女性UC, 全, 元生徒)
○「思いを語り合うことについて、周りは「発言を強制されているのではないか」「パフォーマンスではないか」というような、どちらかといえば否定的な意見があることを感じてはいました。それは、当時の先生方の中でも、中学生であった同級生の間でも、保護者の間でも、肯定・否定の意見が分かれていたように感じていました。ただ、立場を超えて意見が分かれていたことが、私にとってはまさに「人権学習」であったように思います。大人にも、子どもにも、それぞれいろいろな意見を持った人がいて、答えのない問いのようなものに、みんなが向き合っているような感覚でした」(30代女性OC, 全・集, 元生徒)

中学時代に人権学習の本当の意義や大切さは分からないのかもしれない。しかし、自分の内にある本当の思いを出し合うような人権学習を経験しておくことで、その後の人生観が大きく変わるといえることを読み取ることができる。

また実習校における課題としてあげられている、「無関心で傍観的な態度をとる生徒」が、将来差別をする側にもされる側にもならないために、また正しいことを知ったうえで真に人権が尊重される社会づくりの一員となっていくために有効だと考え、「人権、大切」とまとめた。

⑦ 「人と人として、大切」

○「先生が対等に降りてきてくれたことが大きかった。他のこと(生徒指導や部活動)は上からの指導みたいな感じだから、一緒に並べられたら何ともイメージが分かりにくいかもしれないけど、人間対人間のつき合いとして向き合おうとしてくれた」(30代女性AZ, 全・集, 元生徒)
○「自分の思いの丈を友達や大人(特に先生)にぶつけられたことは、本当に大きな財産だと思います。中学生だった自分は、大人から関心や愛情を受けることは当たり前だと思っていました。しかし自分が大人になって、さらに親になって、どれだけ恵まれていたのか実感します」(30代女性IY, 全, 元生徒)
○「「教師対生徒」「大人対子ども」というような構造で意見が分かれているのではないと実感できたことも、コミュニケーションの在り方についての視野が広がったような気がしたこともあります。ひとりの意見の重みが教師であっても、生徒であっても親であっても、みんな同じであると感じられたことが、全体学習の時間だけではなく、他の生活にもいい影響があったように思います」(30代女性OC, 全・集, 元生徒)
○「今になって、当時を振り返り、先生方がいかに子どもや親、地域と向き合って、時間も労力も費やして「本音を語る場」をつくってくれたのかに思いをめぐらせ、深く感謝の気持ちでいっぱいです。まさしく地域の学校にしかできない、学校の先生にしかできない、子どもや親、地域への「贈り物」であると感じています。今の時代、コミュニケーションをとることが複雑化している中(ネット社会、本音が見えにくい、世代間交流の機会が少なくなっている)、同じような場を作り出すことは本当に難しいと思いますが、だからこそ、人権教育・啓発が大切で、みんなで将来のために続けていくべきことだと考えています。効果を感じるのに長い月日が必要なものなので、今、人権教育や全体学習について語れ、少なくとも私自身には大きな財産となっていることを伝えられたらという想いで、ここに綴ります」(30代女性OC, 全・集, 元生徒)

知識量として教え、教えられる関係はあっても、人権学習においては学習者としてみんな同じ立場であり、同じ目線で悩み考えることが、互いの信頼関係を築いていくということを読み取ることができる。

また実習校における課題としてあげられている、「教師との信頼関係」を築いていくこと、またそれが地域・保護者を巻きこんだ生活の様々な場面において好影響を及ぼすことに有効と考え、「人と人として、大切」とまとめた。

⑧ 「共に、大切」

○「当時の教員のつながりって、今こうやってバラバラになってもあのとき一緒に務めたっていう絆はごっつい固いと思う。それは、考え方も感じ方もやり方もまったく違うけれども、でもあのとき務めた絆っていうのは、私にとっての財産。あの時できた絆っていうのは、教員自体の絆も違うと思う。それは今までのいろいろ務めたけど、やっぱりどこの絆が一番強かったかっていったら間違いなくそれは板野中学校の絆だったと私は思う」(50代女性FC, 全, 教員)
○「子どもたちだけでなく大人であっても誰かに承認してもらいたい。人の弱み、痛みを静かに耳を傾けてくれる、そんな語り合いの場がいくつになっても必要なのではないか」(50代女性YC, 全・集, 教員)

○「その学年が卒業したり、先生が他校に移っても、新入生が入り、新しい先生が入って全体学習が続いていけば、それは、その学校の年輪となって輪が続いていくような気がします」(30代男性IH, 全, 元生徒)

人権学習という教員免許状をもっている教員はどこにもいない。それでも「集団で語り合う人権学習」に取り組むには、教職員集団が助け合い協力し合って、一つとならなければならぬということを読み取ることができる。

また実習校における課題としてあげられている、「教職員にとって個に任されている人権学習」を協働的な取組に変えていき、これまでに培った知識や技能を若手の教職員に継承していくとともに、教職員や生徒という枠を超えて共に取り組んできて良かったと思える「感動」をみんな味わうために有効と考え、「共に、大切」とまとめた。

また、これらの先行実践に関する調査結果を分析するなかで、「集団で語り合う人権学習」が継続的に取り組まれ、より確かな効果をもたらすための2つの要素を抽出した。1つは、「集団で語り合う人権学習」授業実施時に教職員がもつ留意点(【実施上の12の留意点】)であり、2つは、「集団で語り合う人権学習」の間をつなぐ取組(【間をつなげる5つの取組】)である。

【実施上の12の留意点】についてであるが、これまで「集団で語り合う人権学習」の形態をとった学習を数多く見るなかで、効果的だと感じられた授業もあれば、そう感じられない授業もあった。この授業を行う両者にどのような違いがあるのかを考えたとき、いくつかの留意点が浮かんできた。

例えば、生徒のまなざしが自然と発言者に注がれる傾聴の習慣性を身につけさせているだろうか。発言内容にもよるが、傾聴はどの授業においても、発言者が教職員であろうとなかろうと、望ましい姿勢である。それが、学年全体で意思統一できているかどうかの違いは学習活動を行ううえで大きな意味をもつ。特に生徒が発言者の場合、「みんなが聴いてくれている」という実感は、全体から受容されているという実感と結びつき、その集団のなかに自分の居場所を見つけられることへとつながっていく。

また、授業者が必要以上に発言し、生徒の発言に言葉を挟みすぎてはいないだろうか。授業の主役は生徒であり、授業をつくっていくのは生徒である。しかし沈黙に耐えきれなかったり、授業をコントロールしきれなかったりすることへの恐れから、絶えずしゃべり続ける授業者がいる。大切なことは、授業において生徒同士がつながり合うことを通して、互いを認め合い、主体的に学びを深めていくことである。授業者も場面に応じて発言することは必要ではあるが、ファシリテーターとしての要素も持たねばならない。

これらのように、「集団で語り合う人権学習」を行ううえでの留意点を12点抽出し、【実施上の12の留意点】としてまとめた。(巻末資料4・5)

【間をつなげる5つの取組】についてであるが、「集団で語り合う人権学習」は基本的に非日常の単発の取組である。しかし、それだけでは効果的とはいえない。複数回取り組まれていくなかで、常に次の授業を意識し、その間をつなぐ日常的な取組を継続していくことで、より効果を高められるといえる。

例えば、生徒と日常的に交わす生活ノートのやりとりのなかで、人権学習の中身について踏み込んだ対話を行うことにより、生徒の身近にある様々な人権課題が明らかになってくる。そして、生徒の思いや考えなどの内面にふれ、教師も自分の経験や意見を返していく。このような往還をすることで、

生徒は自分の内面を見つめ、深く考えられるようになっていく。また自らの思いを文章表現できるようになっていくとともに、互いの信頼関係も深まっていくといえる。

また、「集団で語り合う人権学習」における生徒の表現力を目の当たりにしたとき、教職員は、それぞれが受け持つ専門教科の授業の有り様を再点検することになるのではないだろうか。自分を表現すること、クラスメイトとつながり合いながら学び合う心地よさに気づいた生徒の姿を見たとき、一斉学習形態だけではなく、能動的で主体的な授業構想へとつながっていくといえる。

これらのように、「集団で語り合う人権学習」の間に、次の授業を意識した取組を5点抽出し、【間をつなげる5つの取組】としてまとめた。(巻末資料6・7)

